

## 動詞と目的語の間 (IV)

小川 明

26. 本稿は『英語英文学研究』第4号の「動詞と目的語(Ⅲ)」に続くものである。ここでは動詞の前置詞による分類の問題を扱う。動詞の分類は、今までさまざまな基準からされてきた。たとえば Vendler (1967) は、アスペクトによる分類であるが、影山 (1996: 41-3) を参考にして簡単にそれを述べてみる。Vendler は動詞を次の4つのグループに分ける。

- (A) 状態 (states): know, believe, have, desire, love
- (B) 到達 (achievements): recognize, spot, find, lose, reach, die
- (C) 活動 (activities): run, walk, swim, push a cart, drive a car
- (D) 達成 (accomplishments): paint a picture, make a chair, push a cart to the supermarket, recover from illness

(A)の動詞は「時間的な制限にしばられない恒常的な状態」を、(B)は「何らかの目標(状態)にいたるといふ行為の終了点を重点的に述べ」、(C)は意図的に開始したり終了したりできる行為を示し、(D)は「何らかの活動の結果、最終的な目標(状態)に至ることを意味する。」

この意味上の分類はシンタクスの現象と連関する。例えば進行形については次のようになる。

- (1) a. \*He is knowing the truth. (状態)
- b. She is dying. (到達)
- c. She is swimming. (活動)
- d. She is painting a picture. (達成)

また for an hour のような期間を示す表現については次のようになる。

- (2) a. \*He knew the truth for an hour. (状態)  
 b. \*She reached the station for an hour. (到達)  
 c. She swam for an hour. (活動)  
 d. \*She made a chair for an hour. (達成)

特に本稿との関係で強調しておきたいことは、動詞の意味とシンタクスが密接に関連していることである。

27. ここでは別の基準で動詞を分類することを試みる。動詞が前置詞を取るか取らないかというシンタクスの観点から動詞を分類して、それがどんな意味上の特性と関連しているのか探してみたいと思う。

まず前置詞との共起を基準として、動詞を次の3つに分類する。

A 動詞：前置詞を取ることが不可能なもの。

- (3) a. He described the event.  
 b. The air attack destroyed the city.  
 c. They established an organization.  
 d. He possesses intelligence.

B 動詞：前置詞があってもなくてもどちらも可能であるもの。ただしある時とない時では意味が微妙に異なることが多い。

- (4) a. He attended (at) the funeral.  
 b. I clutched (at) the child's hand.  
 c. Japan fought (against) the US in the World War II.  
 d. The police are investigating (into) the crime.

C 動詞：前置詞を取らなくてはいけないもの。

- (5) a. I apologized to him for her.  
 b. We object/consent to the proposed new airport.  
 c. I sympathized with her in her suffering.  
 d. He will not respond/reply to such a question.

さてこのような動詞が伴う前置詞の有無の差は、動詞の持つなんらかの意

味の違いを反映しているのであろうか。しかし argue, debate, dispute は on を取っても取らなくてもいいのに、それらと同じような意味を持つ discuss は取ることができない。また meet (with) に対して encounter は with を取らない。このことを考慮すると、前置詞を取るか取らないかの問題は意味との連関性がないのではないかと一瞬思える。しかし広く調べていくと本当のところはどうなのであろうか。

その際これらの動詞の派生名詞形の取る前置詞も考慮する必要があるであろう。一般に派生名詞の取る前置詞は次のように of である。

- (6) a. describe X                    description of X  
 b. destroy X                    destruction of X  
 c. establish X                    establishment of X  
 d. possess X                    possession of X

しかし必ずしもそうではなく、前置詞を伴う B 動詞と C 動詞の場合は、その派生名詞は of ではなく動詞と同一の前置詞を取る。このことは(4)、(5)と次の(7)を比較すると明らかである。

- (7) a. attend (at) X                    attendance at X  
 b. investigate (into) X            investigation into X  
 c. apologize to X                    apology to X  
 d. object to X                    objection to X

注意すべきことは、前置詞を取らない A 動詞に属しているにもかかわらず、その派生名詞形が of ではなく、違う前置詞を伴うものがあることである。

- (8) a. admire X                    admiration for X  
 b. damage X                    damage to X  
 c. help X                    help to X  
 d. need X                    need for X  
 e. obstruct X                    obstruction to X  
 f. resemble X                    resemblance to X

このことから A 動詞は派生名詞が of を取る A1 動詞と of 以外の前

置詞を取る A2 動詞に分かれることになる。さて A1 と A2 の動詞のどちらがより前置詞を取る B や C 動詞に近いのであろうか。これは当然 A2 動詞の方が近いと考えるのが自然な推理と思われる。以上のことを整理すると次のような図で表わすことができる。

動詞の種類		動詞が前置詞を取る	派生名詞が of を取る
A 動詞	A 1 動詞	—	+
	A 2 動詞	—	—
B 動詞		±	—
C 動詞		+	—

動詞が前置詞を取るかどうかとその派生名詞が of を取るかどうかという二つの基準において、A2動詞は境界領域を占めていることがわかる。

28. さて本題に戻ろう。動詞が前置詞を伴うかどうかという問題と、意味の間にはなんらかの関連があるのであろうか。小川（1997; 1998a）において考えた仮説は次のようなものである。まず山梨（1995: 239-241）と河上（1996: 117-125）を参考にして目的語の種類を意味的基準で分けてみる。

(i) 動詞の示す行為により、目的語の示す物の状態変化が引き起こされるもの。

- (9) a. John broke the window.  
b. Mary melted the ice.

(ii) 動詞の示す行為により、目的語の示す物が新しく創られるもの。

- (10) a. John built a house.  
b. Mary dug a hole in the garden.

(iii) 動詞の示す行為により、目的語が示す物の位置変化が引き起こされるもの。

(11) a. John moved the chair a little.

b. She shifted her package from one arm to the other.

(iv) 目的語が動詞の行為の相手を示している。

(12) a. He met (with) her.

b. He thanked the man.

(v) 目的語が動詞の行為の対象を示している。

(13) a. I clutched (at) her hand.

b. Tom shot (at) the bird.

(vi) 目的語が注意や意識の向けられる対象を示している。

(14) a. John looked at the strange man.

b. John listened to his advice.

この分類は動詞の行為が目的語の示す対象に影響を与える程度において階層性をなしている。目的語が示す対象は、(i), (ii)において一番強く動詞の影響を受け、(iii)から(iv)(v)に、さらに(vi)に進むにつれて段々弱くなると思われる。認知言語学では他動詞構文のプロトタイプは(i)と考えている。

さてこの意味上の分類を土台にして、前置詞の出没に目を向けてみよう。動詞の示す行為によって、目的語の示す物が直接影響を与えられる場合、つまり目的語の形が変わったり、質的な影響を受けたり(i)、無から新しく創られたり(ii)、位置が変わった場合(iii)は前置詞を取らない。それに対して目的語が、行為の相手(iv)、対象の場合(v)は、前置詞を取っても取らなくてもよい。しかし注意や意識の向けられる対象の時(vi)、必ず前置詞を取らなくてはならない。簡単に言えば目的語の受けるインパクトが強いほど前置詞は取りにくくなる。

29.そしてこのことは、他の所で指摘されていることとうまく整合する。Dixon (1991)、池上 (1999)、Jespersen (1933: 116)、後藤 (1994)、Taylor

(1989: 211)、Quirk et al. (1972: 322)、Schlesinger (1995) などが指摘するように同一の動詞は、目的語を直接取る場合のよりも、前置詞を伴う場合の方が、「不完全」、「非完結」、「未達成」的意味合いを持つ。つまり目的語の受けるインパクトはより小さくなると言える。次の例を観察してみよう(17)–(19)は後藤(1994)による)。

- (15) a. Strike him.  
b. Strike at him.
- (16) a. We know him.  
b. We know of him.
- (17) a. The mother clutched her baby in her arms.  
b. He clutched at the branch but he could not reach it.
- (18) a. The young man stabbed himself and died in his mother's arms.  
b. The big man stabbed at the security guard with a knife and grazed the ribs.
- (19) a. I struck him back with all my strength.  
b. The fighter struck at his opponent, but missed.

特に(17)–(19)において、直接に目的語が続く時は達成したことを意味し、前置詞を伴うと未達成であることが、(b)の文の後半の部分から明らかである。これらは同一の動詞についての前置詞の有無の考察であるが、異なる動詞についても同じようにそのことは当てはまるのではないかというのが、ここで追求しようとする問題の根底にある。

30. さて派生名詞形に目を転じてみよう。やはり一つの明らかな傾向が見られるのである。(i)から(vi)に行くにしたがって of ではなく他の前置詞を取る。(i)(ii)(iii)の場合、前置詞は of になる。また(vi)の場合は、すでに述べたように動詞が伴う前置詞がそのまま持ち越される。しかし注目すべきことがある。(iv)と(v)の場合、前置詞を伴う場合と伴わない場合が混在しているが、たとえ

前置詞を取らない動詞でも、その派生名詞は of ではなく、他の前置詞を取る。つまり目的語に対してインパクトが弱くなるにつれて、動詞が前置詞を取らなくても、その派生名詞は of 以外の前置詞を取るようになるのである。このことは以下のことから明らかである。

(20)	a.	destroy X	destruction of X	(i)
	b.	devastate X	devastation of X	(i)
	c.	construct X	construction of X	(ii)
	d.	create X	creation of X	(ii)
	e.	transport X	transportation of X	(iii)
	f.	convey X	conveyance of X	(iii)
	g.	admire X	admiration for X	(iv)
	h.	greet X	greeting to X	(iv)
	i.	help X	help to X	(iv)
	j.	thank X	thanks to X	(iv)
	k.	explore X	exploration into X	(v)
	l.	harm X	harm to X	(v)
	m.	need X	need for X	(v)
	n.	regret X	regret for X	(v)
	o.	glance at X	glance at X	(vi)
	p.	look at X	look at X	(vi)

31. 目的語が受けるインパクトが大きいほど前置詞を取りにくく、その派生名詞は前置詞 of を伴うという仮説はかなり事実接近しているように思われるのであるが、ここでは(i)から(vi)までの動詞だけではなく、それ以外の動詞を広く対象にした時に、この仮説でうまく説明ができるのか、实例にあたって調べてみることにする。

その前に(i)から(vi)の中にほぼ入ってしまうような種類の動詞についても、範囲をひろげてもう少し詳しく検討してみることにする。以下のリストでは、

( ) はあってもなくてもよい任意の前置詞を示す。ここでの目的からみて前置詞を取るか否かが重要であるので、複数の前置詞を取る場合は一つだけあげてを原則にする。ただしふたつ以上取ることができる時、それを示すのが重要と思われる場合、{ } で示す。また aid → aid to などにおける → は、その左側に動詞を、右側にその派生名詞を示し、aid という動詞自身は前置詞を伴わないが、その派生名詞である aid は前置詞 to を取ることを表わす。

(i) 目的語の状態変化を引き起こす動詞

破壊する : break, crack, crash, crush, fracture, rip, shanter,  
smash, snap, splinter, split, tear

曲げる : bend, crease, crinkle, crumple, fold, rumple, wrinkle

ねじる : coil, curl, roll, twist

切る : chip (at), cut (at), hack (at), saw (at)

変える : alter, change, transform

色を変える : color, dye, paint, stain,

混ぜる : blend, mix

形容詞と同形のさまざまな変化を示す動詞 : bare, blind, blunt, busy,  
clear, clean, cool, crisp, dim, gentle, humble, loose, muddy,  
numb, perfect, ready, right, smooth, spruce, tame, tidy

(ii) 目的語である物を新しく作り出す動詞

bake, bore, build, carve, cook, develop, dig, form, knit,  
make, shape, write

(iii) 目的語が示す物の位置変化を引き起こす動詞

送る : airmail, deliver, hand, post, send, slip, transfer

ある仕方で移動させる : bounce, drift, float, glide, move, roll, slide



上下に移動させる : drop, elevate, lift, lower, raise

投げる : fling, hurl, throw, toss

置く : arrange, lodge, mount, place, put, set

除去する : delete, discharge, eliminate, omit, remove

押す、引っ張る : jerk (at), pull (at), push (at)

前置詞 at がつくると試みるという意味を持つことができ、移動しないことがありうるので、位置変化が生じる時は前置詞を取らないと考えるのではないか。それが正しいとすれば原則に対する反例にはならない。「試み (conative)」の at については、小川 (1998b) を参照して下さい。

以下は比喩的に移動と見做せるものである。

盗む・取る : steal, take

与える : award, feed, give, grant, lend, offer, pay, rent

得る : acquire, borrow, earn, gain, gather, get, obtain,  
receive, win

分ける : differentiate, distinguish, divide, separate, sever

売る・買う : buy, purchase, sell

(iv), (v) 目的語が行為の相手や対象を示している。

打撃を与える : bang (against), bash → bash at, hit (at), kick (at),  
lash (against), strike (at)

害を与える : afflict → affliction to, damage → damage to,  
harm → harm to, hurt → hurt to

ある感情を与える : annoy → annoyance to, embarrass → embarrassment  
to, harass → harassment to, offend → offence to, surprise →  
surprise to, threaten → threat to

出会う : encounter → encounter with, meet (with)

衝突する : bash into, bump into, collide with, crash into, smash into

噛む・すする : chew (at), gnaw (at), lick (at), nibble (at), pick  
(at), sip (at), suck (at)

突く : dig (at), jab (at), poke (at), spear, stick (at)

軽くたたく・触れる・こする・ひっかく :  
caress, dab (at), pat {at, on}, scrape (at), stroke, scratch  
(at), touch (on)

くっつく・加わる : add to, adhere to, attach to

邪魔をする : hinder → hindrance to, obstruct → obstruction to

攻撃する・戦う : assault (on), attack → attack on, battle against,  
fight (against), war against

調べる : delve into, examine → examination into, explore → explo-  
ration into, investigate (into), probe (into), research (into)

試みる : aim at, attempt → attempt at, try → try at

一致する : accord with, agree with, coincide with, concur with, cor-  
respond with

異なる : differ from, diverge from

答える : answer → answer to, reply to, respond to

同意する : agree with, consent to

従う : follow (after), obey → obedience to,

追う : chase (after), follow (after), pursue (after), tail (after)

反対する : contradict → contradiction to, object to, oppose → oppo-  
sition to

結合する : combine with, connect {with, to}, link with

助ける : aid → aid to, assist → assistance to, help → help to

尊敬・誉め讃える :  
admire → admiration for, adore → adoration for, esteem → es-  
teem for, respect → respect for, revere → reverence for, vene-  
rate → veneration for

軽蔑する : scorn → scorn for

好む・嫌う : dislike → dislike for, like → liking for, love → love for

望む : desire → desire for, hope for, long for, wish for, yearn for

求める : aim for, ask for, hunt for, look for

必要とする : request → request for, need → need for

残念に思う : regret → regret for, repent → repent for

許す : excuse → excuse for, forgive, pardon → pardon for

以下特に対象が場所である例を挙げる。

(目的語が示す) 場所を移動する :

fly (over), run (along), stride (along), stroll (about), swim  
(across), tramp (over), tread (along), walk (along), travel  
(over)

一方次の動詞は必ず前置詞を伴う。

go along, march along, drift down the river, float on, glide on,  
roll down, slide on,

場所に入る : enter → entrance into, penetrate (through), permeate  
(into), pierce (through)

場所に進む : advance to, approach → approach to, proceed to

場所から降りる : alight from, descend from, dismount from

場所を上下に進む : climb (up), descend, mount

場所を飛び越える・横切る : cross(over), hop over, jump (over), leap  
over

場所を離れる : depart (from), desert, escape (from), flee (from),  
graduate (from), leave (from), refrain from, retreat from,  
shrink from, withdraw from

場所に到達する : arrive at, reach

場所にある仕方で静止する : hang from, lean against, perch on, rest on,

sit at, swing from

以上の例を見ると、(iv)(v)の場合前置詞を伴わない A 動詞と、前置詞が任意の B 動詞と、必ず必要な C 動詞に分かれる。

A 動詞 annoy, damage, embarrass, leave

B 動詞 flee (from), fly (over), graduate (from), jump (over)

C 動詞 add to, aim at, alight from, combine with, glide on

ただし前置詞を取らない A 動詞であっても、その派生名詞は of ではなくそれ以外の前置詞を伴う。annoyance to, damage to, embarrassment to などからそのことは明らかである。このように3つに分かれるのは、なにか意味的な要因があるからなのであろうか。あるいはそれぞれの語が持つ歴史にその原因を求めることができるのだろうか。たとえば、もともとは前置詞を伴わない A 動詞が C 動詞に移行していく時、使われる頻度などが原因で差が生じるようなことはなかったのか。このことはさらに調べる必要がある。

(vi) 目的語が動詞の示す意識の対象である。

見る : gape at, gaze at, glance at, glare at, look at, squint at,  
stare at

聞く : hark to, harken to, hearken to, listen to

ただし see と hear は前置詞を取らない。なぜそうなのかの一応の説明は小川 (1998a: 135) を参照して下さい。

(vi)をとりあえず挙げてみたが、(iv)(v)と明確に区別可能なか自信がない。むしろ(iv)(v)(vi)はひとまとめにして、そのなかで C 動詞が A, B 動詞と異なる点があるのか追求するほうが実りがあるのかもしれない。これは今後の課題にしたい。

32. 以上の動詞は、「動詞の示す行為のインパクトが大きい程前置詞を取りにくい」という仮説によってほぼ説明可能であることが、明らかになったと思うが、さらに違う種類の動詞を視野に入れた場合、この仮説で説明できるだ

ろうか。以下この仮説で説明が不可能に思われる動詞の例を挙げてみる。これらは(i)目的語の状態変化を引き起こす動詞でもなければ、(ii)目的語である物を新しく作り出す動詞でもないし、(iii)目的語の位置変化を引き起こす動詞でもない。動詞の目的語に対するインパクトが小さいと思われるのにも拘らず前置詞を取らないのである。

導く : conduct, escort, guide, lead

避ける : avoid, elude, evade, shun

思う : assume, believe, consider, deem, dream {about, of}, imagine, regard, suppose, think {about, of}

評価する : assess, evaluate, judge, value

非難する : abuse, blame, censure, condemn, criticize, fault, rebuke, scold

これらの派生名詞はblame for, rebuke for のように for という前置詞を取るが、これは目的語を示す前置詞ではない。blame「人」for「事」(They blamed her for having left there.)における目的語の「人」ではなく「事」に対する for である。

所有する : have, own, possess

維持する : keep, maintain

言う : affirm, declare, say

これらの動詞は上の仮説の単なる例外にすぎないのか。あるいはこれらの二つの動詞群は別々の原理によって説明されなければならないのか。もしできれば、もちろん一つの原理によってすべての動詞が余すことなく説明できることがのぞましい。次の機会において、この一つの原理を追求することを試みる。

## 参考文献

- Dixon, R. M. W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford University Press.
- 後藤 弘 (1994) 「他動詞表現と自動詞表現——前置詞の出没」『札幌学院大学人文学会紀要』 54, 111-126.
- 池上嘉彦 (1999) 「‘Bounded’ vs. ‘Unbounded’ と ‘Cross-category Harmony’ (3)」『英語青年』 CXLV. 3, 142-145.
- Jespersen, Otto (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part III. George Allen & Unwin.
- Jespersen, Otto (1933) *Essentials of English Grammar*. George Allen & Unwin.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論——言語と認知の接点』くろしお出版.
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』研究社出版.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*. University of Chicago Press.
- 小川 明 (1997) 「動詞と目的語の間 (I)」『英語英文学研究』 3, 77-92.
- 小川 明 (1998a) 「動詞と目的語の間 (II)」『東京家政大学研究紀要』 38, 127-135.
- 小川 明 (1998b) 「動詞と目的語の間 (III)」『英語英文学研究』 4, 57-67.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
- Schlesinger I. M. (1995) “On the Semantics of the Object,” *The Verb in Contemporary English*, ed. by Bas Aarts and Charles F. Meyer, 54-74. Cambridge University Press.
- Taylor, John (1989) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Clarendon Press.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房.
- 吉川千鶴子 (1995) 『日英比較 動詞の文法 発想の違いから見た日本語と英語の構造』くろしお出版.